

情動知能指数(EQS)と自我態度スケール(EAS)および短縮版ネオ人格目録改訂版(NEO-FFI)間の相関的関連性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大野木, 裕明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/762

情動知能指数(EQS)と自我態度スケール(EAS)および短縮版ネオ人格目録改訂版(NEO-FFI)間の相関的関連性

大野木 裕 明

Goleman (1995) が著した世界的ベストセラー“ *Emotional intelligence* ”を契機として、情動知能指数(EQ)に対する社会的関心が高まっている。EQという用語は1980年代から Bar-On が使ってきたといわれ、実際、Bar-On (1997) は対自己、対他者、適応性、ストレス対処、一般的気分の5つの概念で15の下位尺度から構成されたEQの質問紙尺度を開発している。このほかにも Mayer & Salovey (1995, 1997) などを初めとして多くの研究が始まっている。本稿は、このEQと既存のパーソナリティ尺度との相関的研究である。

EQの測定については日本でも先行的な試みがいくつかあるが、現在、標準化の手続きを経て出版されている心理検査は内山・島井・宇津木・大竹(2001)の情動知能尺度(EQS) 5件法、65項目、以下EQSと略するだけである。このEQS尺度は、自己対応(intrapersonal)、対人対応(interpersonal)、状況対応(situational)の3領域からなっている。ここで後の議論のためにEQSの構成をまとめておくと(後述のTable 3も参照)、1つめの自己対応領域とは、「もっぱら自己の心の働きについて知り、行動を支え、効果的な行動をとる能力」のことである。高得点ほど、自己内部の感情過程について全般に高い能力をもち、自己に関することに限って安定した確実な生活を送れる能力があることをあらわす。自己対応領域は自己洞察、自己動機づけ、自己コントロールの3次元から構成されていて、その下にそれぞれ下位尺度を持っている。すなわち自己洞察は、感情察知と自己効力の2つ、自己動機づけは粘りと熱意の2つ、自己コントロールは自己決定と自制心と目標追求の3つである。2つめの対人対応領域とは、「他者の感情に関する認知や共感をベースに、他者との人間関係を結び維持することのできる能力」のことである。高得点ほど、社会的に人間関係を結び維持する能力に恵まれていることをあらわす。対人対応領域は、共感性、愛他心、対人コントロールの3次元から構成されていて、同様に下位尺度を持っている。すなわち共感性は喜びの共感と悩みの共感の2つ、愛他心は配慮と自発的援助の2つ、対人コントロールは人材活用力と人づきあいと協力の3つである。3つめの状況対応領域とは、「自己を取り巻く、あるいは自己と他者を含む集団を取り巻く状況の変化に耐える力、リーダーシップ、また自己対応領域と対人対応領域の各種能力や技量を状況に応じて適切に使い分ける統制力」である。高得点ほど、

変化する状況を次々と乗り切っていかなければならない集団のリーダーとして必要な能力があることをあらわす。状況対応領域は、状況洞察、リーダーシップ、状況コントロールの3次元から構成されていて、同様に下位尺度を持っている。状況洞察は決断と楽天主義と気配りの3つ、リーダーシップは集団指導と危機管理の2つ、状況コントロールは機転性と適応性の2つである。

本研究では、内山らの尺度が重要であるとの立場から、この尺度の開発に関して残されている未確認、再検討の部分のいくつかを追求する。内山らは尺度開発にあたって、精神健康調査票、楽観性尺度、村上・村上(1997)の主要5因子性格検査(BFPI)との関連性を検討しているのであるが、本研究ではこれに関連する以下の2つの点を明らかにすることを目的としている。その1つは、他の尺度(自我態度スケールEAS)との関連性について知見を広げることである。もう1つは村上らとは異なる別の5因子性格検査(NEO-PI-Rの短縮版NEO-FFI)との関係を実証的に明らかにすることである。

第1の目的に関する自我態度スケール(EAS: ego aptitude scale)は、E・バーンの交流分析とF・パールのゲシュタルト療法を統合した『自己実現への道』M・ジェイムスとD・ジョングウォード、本明ら訳、社会思想社)の理論などを背景にして日本健康心理学研究所が独自に開発した尺度である。批判性、養育性、円熟性、合理性、自然性、直感性、適応性という自我の7つのカテゴリーの得点が算出できるようになっている。行動の動機づけや日常ストレスにおける人的変数を扱っている。

第2の目的はEQSと他の5因子(Big-five)モデルとの相関関係を追って行くことである。内山らは、EQSの自己対応得点がBFPIの勤勉性得点と高い相関係数を示したこと($r = .441$)、同様にEQSの対人対応得点とBFPIの協調性得点($r = .452$)、EQSの状況対応得点とBFPIの外向性得点($r = .420$)で高い相関係数を示したことを報告している。そして、個々の下位尺度得点についても同様の傾向が見られたとしている(Pp.38-39)。また、EQSはBFPIの知性と強い結びつきを示していると述べている。この結果はEQSが人的変数と密接な関わりを持つことをあらわしているが、しかしながらまだ不十分な知見にとどまっているともいえる。その理由は、世界的にみるとBig-Fiveあるいは5因子モデルと呼ばれる尺度としてはCosta & McCrae(1985,1992)によるネオ人格目録改訂版(NEO-PI-R)が有力な尺度としてよく用いられているからである。また、この2種の間ではBFPIの知性とNEO-PI-Rの開放性因子の間には明確な因子の対応関係が見られていないからである(大野木 2004)。したがって、新たにEQSとNEO-PI-R(本研究ではNEO-FFI)の関係を探ることが必要となる。

ここで日本で開発・翻案されている3種の5因子(Big-Five)モデルの心理検査についてその概略をまとめておく。まず1つ目の尺度は、内山らが用いた村上・村上(1997,1999)の主要5因子性格検査(BFPI)である。この5因子は外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性である。2つ目は下中・中里・権藤・高山(1999)によるネオ人格目録改訂版の日本版(NEO-PI-R)である。このNEO-PI-Rは、世界の多くの国で翻案されているCosta & McCrae(1985,1992)の日本版であ

り、その短縮版(60項目)も大学生用として同時に開発されている(以下、NEO-FFI[短縮版ネオ人格目録改訂版]と略称する)。この尺度の5因子は神経症傾向、外向性、開放性、調和性、誠実性である。3つ目は辻平治郎らのFFPQ研究会(1998)によるFFPQ版である。この5因子は内向性-外向性、分離性-愛着性、自然性-統制性、非情動性-情動性、現実性-遊戯性である。これら3種の5因子尺度の因子の相関的対応関係は次のようである(大野木 2004)。

- a) FFPQ の外向性 - BFPI の外向性 - NEO-PI-R の外向性
- b) FFPQ の愛着性 - BFPI の協調性 - NEO-PI-R の調和性
- c) FFPQ の統制性 - BFPI の勤勉性 - NEO-PI-R の誠実性
- d) FFPQ の情動性 - BFPI の情緒安定性 - NEO-PI-R の神経症傾向(-)
- e) FFPQ の遊戯性 - NEO-PI-R の開放性

(BFPIの知性は独自の内容を含んでいるものと考えられている)

そこで、本研究の目的2で検討するEQSとNEO-FFIの関係を推論すると次のようになるだろう。

1) 内山らのEQSの自己対応得点がBFPIの勤勉性得点と関連していることから、本研究ではEQSの自己対応得点がNEO-FFI版の誠実性得点と高い相関関係にあることが予想できよう。

2) 内山らのEQSの対人対応得点がBFPIの協調性得点と関連していることから、本研究ではEQSの対人対応得点はNEO-FFIの調和性得点と高い相関関係にあることが予想されよう。

3) 内山らのEQSの状況対応得点がBFPIの外向性得点と関連していることから、本研究ではEQSの外向性得点はNEO-FFIの外向性得点と高い相関関係にあることが予想されよう。

本研究では以上の2つの目的を中心に調査的検討をおこなう。

方 法

手続 同一の調査協力者に対してEQS、EAS、NEO-FFIの3種類の心理検査への回答を求め統計処理をおこなう。

調査協力者 欠席等による記入漏れを除いた分析の対象は、2003年度前期と後期、2004年度前期に筆者が担当した7つの心理学関連科目の受講学生であり合計398名(男子学生191名、女子学生207名)であった。すべて1~2年生であり、学生の所属は工学、教育、看護学等であるが、看護系学生が多く含まれていた。

結果と考察

得点化 情動知能尺度(EQS)、自我態度スケール(EAS)、短縮版ネオ人格目録改訂版(NEO-FFI)のそれぞれの検査マニュアルに従って採点し得点化した。

1 EQS、EAS の平均値

Table 1 に EQS の尺度間の相関係数および平均値をまとめた。EQS の 3 領域の相互相関は Table の右下にあるように .53、.54、.61 とかなり高かった。また、自己対応領域とその 3 つの下位尺度とは .66、.72、.78、対人対応領域とその 3 つの下位尺度とは .76、.73、.80、状況対応領域とその 3 つの下位尺度とは .80、.77、.81 となっていて数値はかなり安定していた。平均値をみる

Table 1 情動知能尺度 (EQS) の相関係数および平均と標準偏差

尺度	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)	12)	平均 (標準偏差)
1) 自己洞察	.41	.47	.31	.22	.50	.51	.50	.55	.66	.42	.56	3.40 (0.97)
2) 自己動機づけ		.58	.39	.35	.47	.38	.31	.41	.72	.46	.40	3.47 (1.00)
3) 自己コントロール			.33	.35	.49	.52	.42	.58	.78	.46	.58	3.13 (1.02)
4) 共感性				.54	.57	.35	.29	.43	.37	.76	.37	3.91 (0.93)
5) 愛他心					.50	.20	.18	.30	.36	.73	.27	3.78 (1.00)
6) 対人コントロール						.56	.55	.66	.55	.80	.65	3.35 (0.97)
7) 状況洞察							.57	.66	.54	.46	.80	3.32 (1.00)
8) リーダーシップ								.58	.49	.44	.77	3.06 (1.10)
9) 状況コントロール									.59	.58	.81	3.31 (1.11)
10) 自己対応領域										.53	.61	3.24 (0.96)
11) 対人対応領域											.54	3.67 (0.97)
12) 状況対応領域												3.13 (1.02)

n = 398 上記の相関係数はすべて $p < .05$

Table 2 自我態度スケール (EAS) の相関係数および平均と標準偏差

尺度	2)	3)	4)	5)	6)	7)	平均 (標準偏差)
1) 批判性	.30	.34	.46	.34	.33	.17	2.86 (1.07)
2) 養育性		.51	.38	.17	.35	.48	3.38 (1.06)
3) 円熟性			.48	.25	.40	.41	3.05 (1.07)
4) 合理性				.28	.51	.31	2.87 (1.04)
5) 自然性					.42		3.04 (1.08)
6) 直感性						.13	3.08 (0.96)
7) 適応性							3.11 (1.08)

n = 398 上記の数値はすべて $p < .05$

と、自己対応領域および下位尺度、状況対応領域および下位尺度に比べて、対人対応領域が少し高くなっており、特に共感性、愛他心が高い傾向が見られた。

Table 2 に EAS のカテゴリ間相関係数および平均値をまとめた。45以上を1つの目安として強い関連性を示す組み合わせを記述すると、合理性は批判性、直感性、円熟性との間に高い数値を示した。円熟性は養育性と、養育性は適応性との間で高い数値を示した。平均値は3の前後にまとまっていた。

2 EQS と EAS の相関関係

本研究の第1の目的を検討するために、Table 3 に EQS と EAS 間の相関係数をまとめた。一般的に数値がそれほど高くないので相関係数が40以上を目安として傾向を探ってみると、自己対応領域では養育性(42)、円熟性(41)、合理性(45)との間で比較的高い数値になった。下位尺度では、自己洞察~直感性(40)、自己コントロール~合理性(40)が見られる程度であった。

対人対応領域では、養育性(53)、円熟性(45)で40以上の数値を示した。下位尺度では、養育性の3つ(共感性、愛他心、対人コントロール)との間でいずれも密接な相関関係を示した。このほかには、愛他心~適応性(44)、対人コントロール~円熟性(42)、対人コントロール~直感性(48)などが高い数値であった。

Table 3 情動知能尺度 (EQS) と自我態度スケール (EAS) 間の相関係数

EQS \ EAS	批判性	養育性	円熟性	合理性	自然性	直感性	適応性
自己対応領域							
自己洞察	.25	.42	.41	.45		.35	.31
自己動機づけ	.19	.33	.34	.30	.17	.40	.17
自己コントロール	.13	.34	.28	.40		.22	.28
対人対応領域							
共感性	.22	.53	.45	.32	.21	.38	.39
愛他心	.23	.45	.37	.24	.20	.33	.31
対人コントロール	.21	.49	.42	.39	.25	.48	.27
状況対応領域							
状況洞察	.31	.35	.34	.49	.23	.48	.14
リーダーシップ	.26	.31	.31	.47	.25	.46	
状況コントロール	.37	.28	.28	.43	.21	.44	
	.22	.38	.33	.48	.17	.43	.27

n = 398 上記の数値はすべて $p < .05$

状況対応領域では、合理性 (49)、直感性 (48) で高い相関関係がみられた。下位尺度では、すべてが合理性および直感性と高い相関係数であり、そのほかには 40 以上はみられなかった。

以上を要約するならば、自己対応領域は合理性をはじめ養育性や円熟性等との間で、対人対応領域は特に養育性あるいは円熟性との間で、状況対応領域は合理性および直感性との間で比較的に高い相関係数を示したといえよう。ただし、これら EQS と EAS の下位尺度の間での独自の対応関係はうかがわれず全般的に数値は高くはなかった。

3 EQS と NEO-FFI の相関関係

Table 4 には NEO-FFI の平均値と標準偏差および相関係数を示した。相関係数は全般的に低く、平均値は 3 の前後にまとまっていた。

目的 2 について検討するために、EQS と NEO-FFI 間の相関係数を算出して Table 5 にまとめた。まず、EQS の自己対応得点であるが、この得点は NEO-FFI の誠実性得点との間で .46 の高い相関係数を示した。この数値は NEO-FFI の他の 4 因子と比べても明らかに高かった。したがって、内山ら (2001) が表 3-12 で示した EQS の自己対応得点 ~ BFPI の勤勉性得点間の強い相関関係が、本研究で用いた EQS と NEO-FFI においても新しく認められたことになる。つまり、内山らの研究と本研究を総合すると、EQS の自己対応得点は BFPI の勤勉性得点および NEO-FFI の誠実性得点と高い相関関係にあり因子的対応が見られる。

次に EQS の対人対応得点であるが、本研究の結果では NEO-FFI の外向性とは .36、調和性とは .33、誠実性とは .29 の相関係数を示した。したがって、NEO-FFI のいずれか単独の次元、特に調和性得点と対応するという特徴は認められなかった。この結果は内山らの研究で BFPI の協調性と高い相関係数を示した結果と一致しなかった。ただし、神経症傾向得点と有意な相関関係が見られない点は内山らの結果と同じ結果になっている。

最後に EQS の状況対応得点であるが、本研究の結果では NEO-FFI の外向性とは .31、誠実性とは .35 の相関係数を示した。したがって、内山らが BFPI の外向性と強い相関関係にあるとす

Table 4 短縮版ネオ人格目録改訂版 (NEO-FFI) の相関係数および平均と標準偏差

尺度名	2)	3)	4)	5)	平均 (標準偏差)
1) N 神経症傾向	- .20		- .26	- .24	3.15 (0.95)
2) E 外向性			.34	.22	3.16 (0.93)
3) O 開放性			.15	.17	2.75 (0.88)
4) A 調和性				.21	3.16 (1.05)
5) C 誠実性					3.26 (1.08)

n = 398 上記の数値はすべて p < .05

Table 5 情動知能尺度(EQS)と短縮版ネオ人格目録改訂版(NEO-FFI)間の相関係数

EQS \ NEO-FFI	N 神経症傾向	E 外向性	O 開放性	A 調和性	C 誠実性
自己対応領域	- .24	.16	.24	.12	.46
自己洞察	- .15	.12	.13		.34
自己動機づけ	- .13	.12	.20		.39
自己コントロール	- .26		.18	.13	.36
対人対応領域		.36	.24	.33	.29
共感性		.30	.20	.25	.21
愛他心		.16	.15	.35	.22
対人コントロール	- .15	.38	.16	.25	.31
状況対応領域	- .27	.31	.22	.15	.35
状況洞察	- .25	.26	.20		.29
リーダーシップ	- .16	.22	.26		.26
状況コントロール	- .27	.30	.18	.18	.38

n = 398 上記の数値はすべて p < .05

る結果とは一致しなかった。数値は有意ではあるが、この数値が特別に大きいわけではなくむしろ誠実性との間の方がわずかながら大きかった。

最後に、EQSの下位尺度得点とNEO-FFIとの関連性について得られた結果をまとめる。NEO-FFIの神経症傾向は、自己対応領域、状況対応領域のすべての下位尺度と有意であった。一方、対人対応領域および下位尺度の共感性、愛他心とは有意ではなかった。NEO-FFIの外向性は、すべての下位尺度と有意であった。その傾向は対人対応領域や状況対応と比べて自己対応領域の方が低いように見えるがその傾向は明らかな程度には至っていない。NEO-FFIの開放性は、すべての下位尺度と有意であった。しかしながら、3領域のいずれかに特に強く関連しているというような傾向はうかがえなかった。NEO-FFIの調和性は、3領域の中では対人対応領域と関連性が強い傾向がみられた。NEO-FFIの誠実性は、すべての下位尺度と有意であった。特に、誠実性と強い関連性が見られるのは前にまとめた通りであるが、対人対応領域、状況対応領域にも関連性を示した。主な結果はこのようであるが数値は全般的に低く、これらの傾向はそれほど顕著なものとはいえないだろう。

目的2ではEQSの自己対応領域がNEO-FFIの誠実性次元と高い相関関係にあったのは予想通りであったが、EQSの他の2領域でNEO-FFIと明確な対応関係が見られなかった。ただ内山らの結果でもEQSはむしろBFPIの知性次元との強い結びつきが見られている。2領域についての本研究の結果がNEO-FFI尺度に独自のものかどうかは今後の課題として残されている。

要約 内山ら(2001)の開発した情動知能指数(EQS)の尺度について、他のパーソナリティ尺度との関連性を調べるために、自我態度スケール(EAS)および短縮版ネオ人格目録改訂版(NEO-FFI)を学生398名(男子191名、女子207名)に対して実施して、相関分析をおこなった。目的1は新しくEQSとEASの相関関係を探ることであった。結果であるが、EQSの自己対応領域ではEASの養育性、円熟性、合理性との間で40程度の相関係数が認められた。EQSの対人対応領域ではEASの養育性(53)および円熟性(45)との間で高い数値が得られた。EQSの状況対応領域ではEASの合理性および直感性との間で50に近い数値が得られた。目的2は新しくEQSとNEO-FFIの相関関係を探ることであった。結果であるが、予想通りEQSの自己対応領域は相対的にNEO-FFIの誠実性と高い相関があった。しかし、EQSの対人領域得点とNEO-FFIの調和性得点、EQSの状況対応領域とNEO-FFIの外向性得点は、予想を否定するものではないにせよ、顕著な相関関係は見出されなかった。

引用文献

- Bar-On, R. 1997 *Development of the Bar-On EQ-i: A measure of emotional intelligence*. Chicago: Annual Convention of the American Psychological Association.
- Costa, P.T.Jr., & McCrae, R.R. 1985 *The Neo Personality Inventory manual*. Odessa, Fla.: Psychological Assessment Resources.
- Costa, P.T.Jr., & McCrae, R.R. 1992 *NEO-PI-R professional manual: Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and Neo Five-Factor Inventory (NEO-FFI)*. Odessa, Fla.: Psychological Assessment Resources.
- FFPQ研究会(編) 1998 FFPQ(5因子性格検査)マニュアル 北大路書房
- Mayer, J.D., & Salovey, P. 1995 Emotional intelligence and the construction and regulation of feelings. *Applied and Preventive Psychology*, 4, 197-208.
- Mayer, J.D., & Salovey, P. 1997 What is emotional intelligence? In Salovey, P., & Sluyter, D. (Eds.) *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. New York: Basic Books.
- 村上宣寛・村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究 6, 29-39.
- 村上宣寛・村上千恵子 1999 主要5因子性格検査の手引き 学芸図書
- 日本健康心理学研究所 1996 ストレスコーピング、自我態度スケール共通マニュアル-実施法と評価法- 実務教育出版
- 大野木裕明 2004 主要5因子性格検査3種類の相関資料 パーソナリティ研究 12, 82-89.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 1999 NEO-PI-R、NEO-FFI 共通マニュアル 東京心理辻平治郎(編) 1998 5因子性格検査の理論と実際 北大路書房
- 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子 2001 EQS マニュアル 実務教育出版